

**「第三者の視点による教育活動の評価」
—教育活動の成果や課題を「見える化」する取組について—**

清瀬市立清瀬第五中学校
校長 小池 雄志郎
校内研修会

I はじめに —主題の設定と平成27年度の研究内容—

清瀬市立清瀬第五中学校では、「第三者の視点による教育活動の評価」を研究主題に、日本評価学会の協力を得て、教育活動の成果や課題を「見える化」する取組について、二か年にわたって研究を行った。

平成27年度は研究の初年度として、学力調査等いわゆる「テスト」で数値化して評価することの難しい「体験的な学習活動」の評価を研究対象とし、研究目的を学習活動の成果や課題を「見える化」するための評価方法の開発に置いた。そして教員と学校評価士が協働して評価指標を作成し、指標に基づいて評価する方法を考案した。

研究に先立ち、「体験的な学習活動」のねらいを、学校の教育目標の具現化に資するものとして、【考え抜く力】、【前に踏み出す力】、【チームで働く力】の三つの力（「社会人基礎力」経済産業省、2006）の育成に置いた。そして生徒の作文等を評価資料とし、記述内容の分析を行うとともに、生徒や保護者等を対象とした学校評価士によるフォーカス・インタビューを行い、分析結果を補完することとした。

1 研究の経過

(1) 協議（4～5月）

学力調査等では測れない成果の「見える化」を目的とし、二つの「体験的な学習活動」（第2学年校外学習「都内巡り」5月実施、第2学年職業体験「農業体験」10月実施）を評価対象として研究を進めることとした。

(2) 協議（6～9月）

「都内巡り」（大学訪問）について、事後の生徒作文を主たる評価資料として記述内容の分析を行い、学校評価士による生徒へのインタビューを行うこととした。その際、教員と学校評価士が協議して9つの評価指標を設定し、指標に基づいて分析を進めた（表1）。

（表1）「都内巡り」9つの指標と分析結果 ※ () 内は記述の出現率

【考え抜く力】	【前に踏み出す力】	【チームで働く力】
①目的を定め確認しながら活動している。(20%)	④新しい知識を身に付けている。(76%)	⑦各自がリーダーの役割を理解し、活動への見通しをもっている。(23%)
②困難に直面した時に試行錯誤しながら解決方法を探っている。(3%)	⑤ルールやマナーの大切さに気付き、それに基づいて活動している。(36%)	⑧他のメンバーと協力して活動している。(28%)
③今後の自分に必要な事柄について意識している。(38%)	⑥不明な点や疑問などについて調べたり尋ねたりしている。(21%)	⑨各自が責任をもって行動している。(19%)

(3) 協議（10～12月）

「農業体験」は、少人数の活動であることから、評価する力を【考え抜く力】と【前に踏み出す力】の二つに絞り、5つの指標を設定した。指標に基づいて生徒作業日誌（保護者感想記入欄あり）の記述を分析し、学校評価士による保護者、地域代表者へインタビューを行った（表2）。

（表2）「農業体験」5つの指標と分析結果 ※ () 内は記述の出現率

【考え抜く力】	【前に踏み出す力】
①関心をもって体験したり、農家から話を聞いたりしている。(95%)	④体験を踏まえて、今後の自分の行動について希望や意思を表明している。(45%)
②関心をもった体験や話をまとめて、感想をもっている。(92%)	⑤「保護者が」生徒の行動や発言の変化に気付いている。(53%)
③まとめた感想をもとに自分なりに関心を発展させて考えている。(73%)	

(4) 協議（1～3月）

分析結果をまとめ、保護者会や学校運営連絡協議会等で公表するとともに、報告書を作成して地区教育委員会

に提出した。

2 研究の結果

生徒の作文を見ると、「都内巡り」では、指標ごとの記述の出現率は低いものの、その割合は記述した人数の割合とほぼ同じで、多くの生徒全員がいずれかの指標について記述をしていることが分かった。生徒は互いに協力して活動しようとする意識が高く、グループ活動全体に目を向けつつ、一人一人の役割を意識するというバランス感覚が読み取れた。生徒は、活動を通じて様々な関心を示しながら新しい知識を身に付けているが、次の行動に踏み出そうとする意識はまだあまり高くはないことも分かった。

「農業体験」では、生徒は活動内容に関心をもって取り組んでいることがわかった。体験を通して学んだことをまとめた上で自分なりに考えを深め、次の行動につなげようとする意志を表明している生徒が多かった。記述量の少ない生徒からも、自分なりの考えを発展させようとしていることがうかがえた。また「保護者感想記入欄」の記述やインタビューから、記述に見られない生徒の変容が保護者によって観察されているケースもあった。「農業体験」は「都内巡り」に比べ、全体としてより一層の成果が表れていた。

II 平成28年度の研究内容

平成28年度は、前年度に引き続いて「体験的な学習活動」の評価を研究対象とし、キャリア教育の全体計画及び年間指導計画を見直すとともに、取組のねらいや評価方法を吟味していくこととした。

1 研究の経過

(1) 協議（4～5月）

本校のキャリア教育の全体計画及び年間指導計画を見直し、取組のねらいや評価方法を再検討した。今年度は四つの「体験的な学習活動」（第2学年「都内巡り」6月実施、第3学年「赤ちゃんのチカラプロジェクト」6月実施、第2学年「農業体験」10月実施、第2学年「スキー移動教室」1月実施）を評価対象として研究を進めることとした。

(2) 協議（6～9月）

「都内巡り」（大学・大使館訪問）について、ねらいである「班や係での活動を通して互いに協力し、また自分の仕事について責任をもち、積極的に行動する」をさらに3つの観点（〔観点①〕気付きがあったか、〔観点②〕実行したか、〔観点③〕これからしたいと考えたか）に分け、事後の生徒作文を分析した（表3）。

また、「赤ちゃんのチカラプロジェクト」（赤ちゃんとお母さんが来校して生徒と触れ合う活動）については、三つの力のうち、【前に踏み出す力】と【チームで働く力】に重点を置くとともに、ルーブリック（評価規準）を作成し（表4）、学校評価士による観察をもとに分析を行った。

（表3）「都内めぐり」観点ごとの生徒記述数の分布

生徒記述数の分布						
記述生徒数/ 作文総数	〔観点①〕気付きがあったか		〔観点②〕実行したか		〔観点③〕これからしたいと考えたか	
	協力	責任	協力	責任	全記述	うち、具体的記述
37/97	23	10	24	19	9	3

（表4）「赤ちゃんのチカラプロジェクト」ルーブリック試案

評語	知識の適用（赤ちゃんを大切に扱う）	ソーシャル・スキル（対話と積極性）
「3」良い	赤ちゃんを大切に扱い、話しかけ、柔軟に対応する。	【前に踏み出す力】積極性、イニシアチブ、保護者との会話。 【チームで働く力】グループメンバーを助ける。
「2」だいたい良い	赤ちゃんを危険なく扱う。赤ちゃんの目を見て抱くことができる。	グループメンバーへの同意や理解を明瞭に態度で示し、自ら赤ちゃんをあやす。
「1」もう一歩	赤ちゃんの抱き方、接し方が不適切。	傍観、赤ちゃんに近づかない。

(3) 協議（10～12月）

「農業体験」について、昨年度と同様、評価指標に基づいて生徒作業日誌の記述を分析することとした。教員による工夫として、「都内巡り」の反省を生かし、生徒にねらいを明確に提示するとともに（表5）、このねらいに基づいて評価指標を設定し（表6）、分析を行うこととした（表7）。

(表5)「農業体験」のねらい

①【考え抜く力】 農業体験を通して、a) <u>農家の方とコミュニケーションを図り</u> 、b) <u>仕事に対する農家の方の思いを理解し</u> 、c) <u>働くことの意義や大切さへの理解を深める</u> 。
②【前に踏み出す力】 農業体験を通し積極的に行動することにより、a) <u>仕事に対する楽しさや辛さを実感し</u> 、b) <u>働くことへのより良い職業観を身に付け</u> 、c) <u>自分の行動の変化の良い機会とする</u> 。
③【チームで働く力】 農業体験を通して、a) <u>仕事が成立するには計画性が大切であること</u> とb) <u>各担当での協力が必要であることを学ぶ</u> 。

(表6)「農業体験」のねらいに基づく評価指標

	ねらいの文言	育成を目指す「生徒の資質・能力」
①a)	農家の方とコミュニケーションを図り	【チームで働く力】発信力、傾聴力
①b)	仕事に対する農家の方の思いを理解し	【チームで働く力】柔軟性
①c)	働くことの意義や大切さへの理解を深める	【考え抜く力】課題発見力
②a)	仕事に対する楽しさや辛さを実感し	【前に踏み出す力】主体性
②b)	働くことへのより良い職業観を身に付け	【チームで働く力】状況把握力
②c)	自分の行動の変化の良い機会とする	【考え抜く力】課題発見力
③a)	仕事が成立するには計画性が大切であること	【考え抜く力】計画力、課題発見力
③b)	各担当での協体制制が必要であることを学ぶ	【チームで働く力】状況把握力

(表7)「農業体験」8つの指標と分析結果

	生徒の記述						保護者の記述	
	学習中の記述		学習後の記述		記述全体		記述数	出現率
	記述数	出現率	記述数	出現率	記述数	出現率		
①a)	2	2%	2	2%	4	4%	0	0%
①b)	20	21%	38	39%	58	60%	5	5%
①c)	37	38%	56	57%	93	96%	34	35%
②a)	161	169%	79	81%	240	247%	29	30%
②b)	12	12%	49	51%	61	63%	9	9%
②c)	23	23%	50	52%	73	75%	5	5%
③a)	1	1%	11	11%	12	12%	1	1%
③b)	11	11%	16	16%	27	28%	1	1%

(4) 協議 (12月～2月)

「スキー移動教室」について、事後の生徒作文を主たる評価資料として記述内容の分析を行うとともに、学校評価士による生徒へのインタビューを行った。教員による工夫として、ねらいを重点化し(表8)、ねらいに基づいて生徒への事前指導を行った。

(表8)「スキー移動教室」のねらい ※ ◎は最も重点を置く項目、○は次に重点を置く項目

① ○【考え抜く力】、◎【前に踏み出す力】 スキー実習を通して、上手に滑るために考え工夫しようとする意欲や、寒さや疲労などの困難に打ち勝つたくましさを養い、上達する喜びを味わう。
②【チームで働く力】 中学校生活初めての宿泊体験を通して、普段の生活では気付かなかった友達の良いところを発見し、励まし合い、助け合って活動する。

2 研究の結果**(1)「都内巡り」(大学・大使館訪問)**

平成28年度の「都内巡り」は、平成27年度に行った大学訪問に加えて大使館訪問を行った。[観点①]「気があったか」については、ハプニングの際に皆で協力して問題を解決したことの記述や、それに対する肯定的な感想が多かった。「ルールを守らないと迷惑をかけて大変になる」、「クラスメートが参加できなかったのが残念だ」など、【チームで働く力】につながる記述が見られた。一方、[観点②]「実行したか」については、何らかの気付きはあってもそれが具体的な行動に結び付く記述はほとんどなかった。[観点③]「これからしたいと考えたか」については、大使館での記述が圧倒的に多かった。

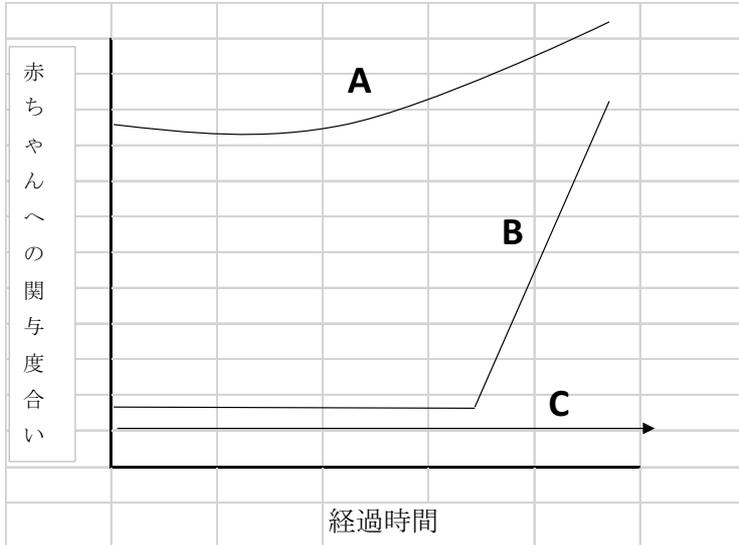
(2) 「赤ちゃんのチカラプロジェクト」

「赤ちゃんのチカラプロジェクト」では、生徒の行動に概ね三つのパターンが観察された（図1）。

A：実習が始まってすぐに赤ちゃんになじみ、抱き上げ、笑いかけ、話しかけている。（評語「3」に相当）

B：赤ちゃんとの交流が進まず低調なまま進行するが、周りから促されたりしながら、一人の生徒の行動などがきっかけで一気に赤ちゃんとの交流が進む。（評語「1」から「3」へ）

（図1）「赤ちゃんのチカラプロジェクト」生徒の行動



C：他のグループと比べ、極端に赤ちゃんとの接触が少ない。最後まで赤ちゃんとの意味ある交流が見られない。（評語「1」に相当）

Bと**C**、特に**C**の活性化のためには周りからのファシリテーションが重要な要素となる。

実習後に「赤ちゃんの触れ合いを通じて感じたこと、考えたコメントを漢字一文字で表してみよう」という学習活動を行ったところ、36種類の漢字が描かれた（図2）。生徒は「命」や「愛」ということだけにとどまらず、幅広い感想をもったことがうかがえた。

(3) 「農業体験」

「農業体験」では、ねらいを8つの指標に分解して評価した。記述の分布を見ると、②a)「楽しさや辛さ」が最も多く、①c)「意義や大切さ」が次に多く出現していた。②c)「行動の変化」もたびたび出現していた。

一方、①a)「農家とのコミュニケーション」、③a)「計画性」、③b)「協力体制」はあまり出現しなかった。保護者の記述の分布では、①c)「意義や大切さ」が最も多く、②a)「楽しさや辛さ」と続いた。

(4) 「スキー移動教室」

「スキー移動教室」では、ほとんどの生徒が、ねらいに基づいた内容の作文を書いていた。

・【考え抜く力】、【前に踏み出す力】について
例) インストラクターの先生のアドバイスが分かりやすかったので、工夫して滑ることが

ができた。疲れたけれど諦めなかった。滑ることができてうれしかった。

・【チームで働く力】について

例) 仲間の大切さを改めて知った。係の仕事責任をもって行った。3年の修学旅行が楽しみになった。

3 成果と課題

以上の研究を通して、「体験的な学習活動」の評価について、次の改善策を得た。

(1) ねらいの具体性と評価規準

平成27年度の反省を生かし、取組のねらいや評価方法を吟味して実施した平成28年度の「都内巡り」であったが、評価に当たっては、それでもまだねらいが抽象的であった。その後、「農業体験」や「スキー移動教室」の取組を通して、ねらいを明確にし、事前学習などで具体的に生徒に示すことによって、生徒の学びは深まり、その学びを事後の作文等で言語化させることによって更に深化させることができた。ねらいを立てる際は、「赤ちゃんのチカラプロジェクト」で行ったように、そのねらいが生徒のどのような行動として実現されるとよいと想定されているのかを、ルーブリックを作成するなどして第三者にも分かるように示す。そして、事後学習の作文においても、「農業体験」で行ったように、どの部分がどの程度できればよいと想定しているのかを明示する。

(2) ねらいと指導と評価の一体化

ねらいは、事前学習時に生徒に考えさせると効果的である。「スキー移動教室」で行ったように、事後学習において自分の行動が事前学習時に考えたねらいに沿っていたかを振り返らせる活動と一体化させる。生徒の行動を活性化させるためには、「赤ちゃんのチカラプロジェクト」で見られたように、周りからのファシリテーションが大切な要素となる。また「農業体験」における保護者のコメントの分布を見ると、それらが保護者から生徒へ、あるいは学校へのメッセージとして捉えることができる。これを保護者の期待と読み換えて評価に生かしていくことも重要な視点となる。「体験的な学習活動」においても、様々な評価の要素、視点を加味しながら、ねらいと指導と評価の一体化を実現していかなければならない。

(3) ねらいの重点化、重み付け

一単位時間で書かせる作文に、全ての観点についての振り返りを書かせるのは難しい。その点を考慮した執筆課題とする必要がある。例えば「農業体験」では、生徒の作文の内容に「計画性」や「協力体制」ということはあまり出現しなかった。しかし、これらは生徒が「都内巡り」や、前年度に行った「校外学習（飯ごう炊さん）」や「農園活動」で既に身に付けた資質・能力であり、ねらいの重点化、いわゆる重み付けを行った結果であると分析している。また、「農家とのコミュニケーション」のように当然過ぎて、生徒からあまり言及されなかった観点もある。今後は、「体験的な学習活動」の全体計画及び年間指導計画において、取組ごとのねらいの重点化や重み付けを意図的に行い、一年間あるいは中学校三年間の活動を通して生徒の資質・能力を高めていくという、中長期的なビジョンをもつことが必要である。

(4) 様々な評価方法

評価の方法としては、作文だけではなく、「赤ちゃんのチカラプロジェクト」の際の「漢字一文字表現」のように様々な工夫が考えられる。このことについて、学校評価士から次のような提言を得た。

漢字の形や大きさ、デザインを工夫し、書き手の思いが伝わる「作品」となっている。表現自体が生徒の気付きや思い、または変容を表していると言えるのかも知れない。生徒による振り返りを、次のプロジェクトにつないでいくためには、一文字漢字を使って振り返るワークショップの開催などを授業に組み込むことなども有効ではないだろうか。

しかしながら、学校の教育活動として、事後学習における作文は定番と言えるだろう。この点について学校評価士から次のようなコメントを得たことを付記しておく。

生徒作文に応える教員のコメントがすばらしい。教員のコメントは、必ずしも三つの力すべてに触れているわけではないが、教員が日頃の業務で培い、今後も使っていくであろう言葉が散りばめられている。それも生徒が体験で見出したことを肯定し、後押しさらに考えを深めることを促している。これは昨年と比べて大きな進展である。さらに生徒の作文が昨年と大きく異なるのは、ポイントを絞って、または順に挙げて記述している生徒が目立つこと。これはおそらく担任から（そして校長から）、生徒に対して三つの力を意識して書くようにという指示や指導があったからではと考えている。

Ⅲ 研究を振り返って

研究の結果、「体験的な学習活動」についても教科の指導と同様、一つ一つの取組に明確なねらいを設定し、ねらいに即して評価を行うことによって、生徒の学びを数値化するなどし、その成果を「見える化」することが可能となることが分かった。

生徒は様々な「体験的な学習活動」を通して、普段の授業では獲得できない学びを身に付けている。このことは経験的に分かっていたことではあるが、今回、教職員と保護者、地域が十分な連携を図って生徒に豊かな体験の場を準備する中で、生徒はその体験の場を活用し相当程度自己を投入して、主体的に思考、判断、表現をしていることが、第三者の視点から明らかとなった。作文などの生徒「作品」は、生徒の多大な努力の結晶であり、生徒の成長を雄弁に物語るものであることが再確認できた。それらは学校の教育活動の成果を「見える化」して行く上で、有効な評価資料となることも分かった。

今後は、学校で行う「体験的な学習活動」の目的や、一つ一つの取組のねらいの明確化していくことはもちろん、設定した目的やねらいに即して学習内容を工夫改善し、目的やねらいに即して様々な評価方法を駆使して評価できるよう、中学校の三年間を見通した指導計画を整えることが課題である。そして実施に当たっては、目的やねらいについて保護者や地域とも十分に共通理解を図っておくことや、指導と評価の一体化を「体験的な学習活動」においても積極的に推進していくことが鍵となる。これらの視点をもとに、引き続き、研究を推進していきたい。

最後に、ご協力いただいた日本評価学会学校評価分科会の皆様、清瀬第五中学校第三者評価チームの皆様から感謝を申し上げます。